

異文化を見る目

丸山孝一

異文化理解の教育

本誌編集委員にはさまざまな専門の人がいる。誌名が示すように、医学と教育学が中心になるのは当然であるが、それらも多くの分野に分かれている。私の専門は文化人類学であるが、その中でも教育人類学と呼ばれる領域に関心を持っている。私が本誌の編集委員に加えられているのも、そういう理由からであろう。

ところで、これを書いている今、中国、韓国で

は反日運動が激しい。ずいぶん以前から、中国語のインターネットでは、南京事件に関するきわめて激しい日本非難がなされていたが、今回の反日運動はこれを実行に移したものとして注目される。中国政府も、これを沈静化する政策を出し始めているようであるが、それにしても中国人の若い世代に根強い反日感情は簡単にはなくなりそうにない。なぜそうなったのだろうか。そして、一体どうしたらいいのだろうか。みんなが考えている。日本人も、そして中国人も。

人の感情や思想が、その人の経験や教育によつ

て形成されることは言うまでもないが、国民感情や民族感情は、個人の場合以上に歴史や集団の力によつて強く方向づけられる。三十年ほど前に初めて韓国へ行ったとき、そこでは反共と反日の教育が学校教育の中で強調されていた。そのような教育が全国規模で徹底して行われているのを見ることは、日本人としてつらいことであつたが、日本がかつてこの国を植民地として支配したことに對して、自分たちが今、責任を負わなければならないことかと考えさせられた。同じことが今、中国で起こっている。中国の教科書を見れば解ることであるが、小中学校の各学年段階で、戦時中における日本軍の残虐な行為が繰り返され、徹底して教育されている。これで反日にならなかつたら不思議なくらいである。加えて、靖国神社問題、日本の教科書問題、尖閣列島問題などの刺激材料があれば、反日感情に火がつくのもかもしれない。

反日教育にも、中国側や韓国側から見れば、それなりの理由と根拠があるであろうし、これを受けての反日運動にも強い主張がある。しかし、長い目で見ると、このような運動は多くの犠牲を伴

いながらも、ある程度のところでブレーキがかかり、収束を見せることが多い。これを社会運動としてみるならば、物理的な運動に似て、ある方向に動いた振り子は、また逆の方向へと戻る可能性がある。これを逆のベクトルへと向かわせる運動のエネルギーは、国際世論の圧力やさまざまな外交上の利害得失によることもあるが、平和教育や異文化理解の教育もまた意味あるものでなければならぬ。

「仲間」とは誰のことか

一般に對立するということは、個人の場合も集団の場合も、私（たち）と彼（彼女）（たち）という二つの立場からの自己主張が互いにかみ合わない状態のことである。これが集団の場合、われわれ対彼らという関係になる。その間には明確な境界線があり、あちらとこちらの区別がはっきりしている。

ところが面白いことに、「われわれ」という集団は、多くの場合その実態は相対的であつて、よ

く経験するように、ある状況では仲間であつても、別の場合には他人になることがある。同様に、「彼ら」という他人の集団も、状況によっては身内になることもある。たとえば、プロ野球の応援では、同じ球団のファンとして強い仲間意識をもつていても、現実には選挙などの政治行動では対立関係になることは珍しくない。

アフリカのスーダンにヌア族という牧畜民族が住んでいる。彼らは父方の祖先が同じであるという考えで結びついており、遠い祖先を共有する子孫は当然多いが、近い祖先を共有する者たちの範囲は狭くなる。祖先を遠くとるか近くとるかは状況次第であつて、時には内輪の仲間が枠の外に出るということもある。だから、争いごとがあつた場合、昨日の敵は今日の友ということもあれば、その逆もある。つまり、この社会では身内と他人の区別が相対的で、その境界線が流動的になるのが特徴である。ヌア族のこのような考え方をもちと広げると、絶対に相容れない敵という者はいなくて、敵に見える人でも、いつかは味方、身内、仲間になるかもしれないので、徹底した争いはで

きなくなる。その代わり、身内がいつ敵側に回るか解らないので、真の信頼関係は難しいかもしれないが、少なくともヌア族内部では「文明社会」に見られるジェノサイド（皆殺し）はない。

ヌア族式の考え方の特徴は、遠いところに身内、つまり信頼できる仲間を見出すことができるということである。これは、たとえそれが仮の友であつたとしても、友であれば信じようということになるし、逆に言えば、今敵と思える人も、いつか身内になるかもしれないと思えば、本当に憎むことができなくなるであらう。自分たちの集団が幾重にも重なっているので、各層ごとに連帯感、帰属意識があり、それぞれにアイデンティティができる。仲間集団が分裂するかもしれないが、「外部」の人と仲間になれる可能性を常に持ち続けるというヌア族のこうした考え方や制度は、もしかしたらすばらしいことなのかもしれない。

多文化共生社会を求めて

ところが、ヌア族の場合も、信頼できる可能性



人類学のフィールドワークで中国のウイグル族社会やタイ農村などによく出かけます。どこへ行っても現地食、現地酒に満足し、後で体重が気になります。最近、勉強熱心な中国人学生に感心し、のんびりした日本人学生が気になる昨今です。

のある人たちの最大限の広がりには、広い意味でのヌア族のみに限られている。祖先を共有しないヌア族以外の人々に対しては、警戒心かせいぜい無関心でいる。今日ではスーダンの部族戦争に巻き込まれたり、男たちは出稼ぎに出なければならなくなるなど、外の世界と関わりを持たざるを得なくなったが、外部との関わりができると共に、ヌア族全体としてのアイデンティティが目覚め、民族意識が強化される。日本人が明治以降、諸外国との外交を始めて、日本人としての意識が目覚めたのと同様である。

今日、世界各地で見られる争いごとの中には「民族紛争」と呼ばれるものが多い。そのなかでも多民族国家内部における政府と少数民族の対立

が特に目立つ。いわゆる少数民族の分離独立運動などがその例である。あるいはクルド人やパレスチナ人のように、国家間の紛争に翻弄されている民族もいる。

このような紛争の渦中に巻き込まれた民族は、外圧によって従来からの生活のあり方を変更するよう迫られている。居住地や言語や宗教を奪われる場合もある。そのような迫害に抵抗して人々は文字通り命がけで戦っている。自分の民族を誇りとする人々のこだわりであり抵抗運動である。

人が自分の命よりも大切だと考える価値があるとすれば、それは何であり、そしてそれはなぜそうなのであるのか。このような疑問を解くためにいろいろ考えることは、全ての人にとって意味のあることであるに違いない。異文化理解が大切であるというのはこのようなことであろう。

しかし、自分の人生観や価値観は、自分の命より大事であると考え、人が複数いて、その人々がお互いに対立し抗争しているというのが今日の状況である。彼らは自分の命が犠牲になるかもしれないが、その前に相手の命を奪おうとしている。

できれば自分の命を犠牲にしないで相手を殺そう
としている。死ねば仲間から殉教者と呼ばれ、相
手からはテロリストと呼ばれる。そして果てしな
い殺戮戦争が続く。

敵か味方かという二分法の考え方からは、な
なか和解の道は探せない。相手側の中に自分たち
と共通の要素を見出し、相異は相異として互いに
認め合うほかはないだろう。ヌア族のモデルはま
さにそのような社会である。全世界が国や民族の
境界線を仮のものと考え、その境界線を柔軟に動
かして自他の区分を相対化する。そして有限の命
の長さ、無限の命の重さ、世代を超えた遺伝子と
民族文化の連続性について語り合う場がほしいも
のだ。そのようなときに、多文化共生社会は見え
てくるかもしれない。

●丸山孝一（まるやま こういち）

福岡女学院大学教授。九州大学名誉教授、新疆師範大学名
誉教授。教育と医学の会理事。専門は、文化人類学。長
年、シルクロードの調査に従事。著書に『現代タイ農民の
生活誌』（編著、九州大学出版会、一九九六年）、『文化相
対論再考』（APCCアジア太平洋研究第22、一九九八年）、
『カトリック土着』（NHKブックス、一九八〇年）など。

■ご案内■

第24回日本精神衛生学会ワークショップ

メモリー・ケアワーク：記憶喪失（認知症）の人と語ろう

日 時：2005年6月26日（日）10：30～12：00、13：30～16：00

会 場：東京しごとセンター5階（東京都千代田区飯田橋）

定 員：40名

参 加 費：学会員6000円 非会員7000円

講 師：喜多祐莊（東海大学健康科学部社会福祉学科教授）

（1）記憶再生会話技法の手順と技法 （2）事例検討
（3）ロールプレイ （4）ふりかえり

申し込み方法：氏名・性別・会員または非会員・連絡先住所と電話番号・勤務先名お
よび職種をご記入の上、郵便またはFAXにてお送りください。

申し込み：国立看護大学校 ^{おおか} 鉅鹿研究室

問合せ先 〒204-8575 東京都清瀬市梅園1-2-1

TEL 0424-95-2398 FAX 0424-95-2659